

大学図書館の在り方について

－別府大学附属図書館 6 年を振り返って－

立花 志保

1. はじめに

現在、別府大学の職員として働き始めて、6 年目になります。現在の大学や図書館の状況をふまえながら、これまで別府大学附属図書館で取り組んできたことを振り返りつつ、大学に貢献する図書館としての在り方、また図書館員としての在り方を考察していきたいと思えます。

2. 大学図書館の現状

大学図書館は、大学における学生の学習や大学が行う高等教育と学術研究活動全般を支える重要な学術情報基盤であり、大学にとって不可欠な機能を有する大学の中核を成す施設として、大学の教育研究に関わる学術情報の体系的な収集、蓄積、公開や教育研究に対する支援などの役割・機能を担っています。

今日、学術図書・ジャーナルの価格の高騰など、学術情報基盤を取り巻く状況はめまぐるしく変化を遂げています。学術情報の中でも、特に研究成果を発表する論文の刊行媒体は、従来の紙媒体からインターネットによって頒布される電子ジャーナルに移行しています。このため、紙媒体による情報と電子化された情報とを有機的に補完しつつ、利用者である学生、教職員等に効果的かつ効率的に提供することが求められています。

こうした状況を踏まえ、学術情報基盤が学術研究活動を継続的に支え、その高度化を可能にするための基本的な考え方や国が考慮すべきこと等について、科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会（以下「作業部会」という）において検討を行い、平成 18 年 3 月に、1. 学術情報基盤としてのコンピュータ及びネットワークの今後の整備の在り方、2. 学術情報基盤としての大学図書館等の今後の整備の在り方、3. 我が国の学術情報発信の今後の在り方の 3 項目を内容とする「学術情報基盤の今後の在り方について（報告）」をまとめています。平成 19 年 4 月以降、引き続き学術情報基盤を取り巻く状況の把握、課題等について整理するとともに学術情報基盤の整備に関する推進方策等について検討を行っています。

このうち、1. については、平成 20 年 12 月に審議の結果を取りまとめ、さらに、平成 21 年 3 月からは、作業部会において、大学図書館の整備や学術情報流通の在り方について審議を行っています。

現在、大学全体の管理運営費が削減される状況の中で、人件費も含め大学図書館運営費も例外ではなく、非常に厳しい状況にあると思えます。国立大学が法人化され、各大学において中期目標・中期計画などが挙げられていますが、私立大学においても目標、計画な

どを立て、方向性を明確にすることは必要です。

大学を取り巻く社会の高度情報化の中で、大学における教育目的の多様化と研究活動に対する社会的要請の変化と高度化に対するため、大学図書館においても、大学の目標や計画に沿った形でその機能を拡充し、高機能化、効率化を図る必要があると思います。

その考えから、下記の「財務力」「教育力」「就職力」の大きく3つをあげて図書館が大学の目標、計画などと照らし合わせて、いかに貢献できるかを考えてみたいと思います。

図書館における「財務力」－支援そして資金を生み出す力－

大学において産官学連携や共同研究による外部資金の導入は必須ですし、継続的に社会的利益を生み出す必要があります。そのようなイノベーションを生む研究者を専念させるには、支援スタッフが不可欠だと思います。

このため、資料収集やレフェラルサービスにおいて、図書館がサポートすることが可能です。また、図書館においても他大学、学内各部署とさまざまな連携をとりながら、CSI事業の受託や科学研究費補助金や助成金の獲得などの必要があると考えます。

図書館における「教育力」－様々な利用方法を提案する力－

教育支援が第一に挙げられます。そのために情報発信力、オープンアクセスへの対応が必要だと考えます。教育支援としては、初年次教育、教養教育や卒業論文、卒業研究についての、パスファインダー作成を行うことや、学部や学年に応じた情報リテラシー教育を行う必要があります。

情報発信力、オープンアクセスへの対応としては、電子ジャーナル、機関リポジトリを推進することが必須です。また、目録データの品質向上が必要であり、各図書館間の連携を深め、よりスムーズな資料の入手方法の提案が求められます。

図書館における「就職力」－日々の生活を通して身につける力－

情報利活用能力は、就職の際、インターネットを使う状況において、学んでおかなければならない能力の一つと考えます。大学の講義にある初年次教育や情報リテラシー教育などを通して、就職力を高めることが可能です。

また、レポート作成、卒論などを図書館活用講座の一環として指導し、文章の書き方全般を学ぶことで、就職活動の際の履歴書、または、自己PRなどの書き方を学ぶことができますし、資料送付時の注意点など就職のバックアップも行うことができます。

また、SD研修などで、就職にかかわる担当の方が、普段の生活においてコミュニケーション能力や経験値をあげることは、大切だとお話しされていました。

図書館においては、FOBUL という学生ボランティアに図書館の作業を手伝ってもらっていますが、作業に対する責任感が芽生えたり、職員が働いている姿を見て自分の将来像に照らしあわせたりということもあるようです。また、職員と会話することで、大人への対応も自然と身につきます。これからの試みとしては、TA (Teaching Assistant) として、学

生に図書館利用者の対応をしてもらうことも考えられます。私達もそうですが、実際利用者に説明することで、私達自身、学びが増え、成長があります。そのような経験を学生に与える機会ができればと思っています。

このように図書館においても、学生の指導、教育に力を入れていくことが、学生にとっての就職力を培うことができると考えています。

3. 学生支援の事例を元に

学生支援といってもさまざまな方法があると思いますが、今回は2大学の事例を、箇条書きにして、述べていこうと思います。

<事例1：フェリス女学院大学附属図書館>

- ・2002年度より「読書運動プロジェクト」を行い、読書を通して学びを見つける
- ・年間の課題図書として「フェリスの一冊の本」を選定し、読書会や講演会、論文コンクール、テーマに関する音楽会などの企画が出される。

図書館の役割を学習支援のみならず、読書を通じて学生の内面の成長をも支援する場として活用していった事例だと考えられます。

<事例2：お茶の水女子大学附属図書館>

- ・お茶大図書館の理念をたてる
- ・図書館整備（ラーニングコモンズ、キャリアカフェ）
- ・学生支援（ラーニングアドバイザー）
- ・外部資金の導入
- ・学生ILL料金の無料化
- ・スタッフとLiSA（学生ボランティア）の活動
- ・パソコン貸与プログラム

「第55回学校読書調査」で、本を読むことが好きな中学・高校生の割合が7割を超えているという記事がありましたが、中学校、高校そして大学へとつなぐには読書支援環境は必要です。

学生利用の促進を考えるとすれば、図書館の基礎的な視点に立ち返ることも大事ですし、図書館の概念がくつがえされるような取組をこれからも行っていく必要があると考えます。

4. 図書館利用を促進するには

図書館を利用される方々は、図書館の良さというものをそれぞれの経験から理解されていると思いますが、全く利用していない学生には、図書館の良さは理解しにくいようです。

こちら側から見ても、「なぜ、学生は図書館に来ないのだろう」という思いだけでは、講義や日常に接点がない私達では、図書館に来た学生、カウンターに来る学生に良さを伝えることしかできません。そのためには、私達自身も学生との接点を増やす機会が必要です。今年度でオリエンテーションの際に「情報リテラシー」の冊子を配布して4年目になりますが、1年生の際に図書館に来ることを習慣づけることができれば一番いいのかなと思います。

5. 来館者への対応

より高度な問題に取り組み専門的な回答を必要としている人、簡単でわかりやすい説明を必要としている人がいて、どちらも補うことが、不可欠なのではないかということを感じます。簡単でわかりやすい説明を必要としている人も、その積み重ねが前者になる可能性があるので、質問のできる雰囲気づくりが必要だと思います。カウンターにいる際、職員が挨拶をするなどして、話しやすい雰囲気をつくるような心がけが大事だと思います。

6. おわりに

『図書館は信頼できる図書館として在り続けたい』というのが私の願いです。そのため、さまざまな意見や方法を取り入れながらも図書館員としての姿勢を貫くことができればと思っています。

その姿勢とは、「あたりまえのことをあたりまえに」の追求と、加えて新しいことを取り入れながら発展させていこうとする気持ちを持つということです。

図書館で働くことで「図書館は欠かせない場所である」と1人でも多くの人に感じてもらえるように、また、学生が卒業して社会人になってからも図書館を利用したことで生活や仕事に応用できるような取り組みを行えるように働きかけることが大学の図書館員としての努めであると思っています。

別府大学の建学の精神『VERITAS LIBERAT 真理はわれらを自由にする』は、国立国会図書館の理念「真理がわれらを自由にする」と1字違いです。とらえどころがないようですが、国立国会図書館は、本を主としているのに対して、別府大学は、大学という場所を通して、各々が己の真理を模索していく自発的な態度がその言葉にあらわれていると感じます。一方的でなく、教育を与える側、学び受入れる側にお互いながら、この場にいる人全てが、自らの真理を明らかにしながら生きていくということなのかもしれません。

別府大学の卒業生として6年、職員として6年、あわせて12年間培ってきた『真理はわれらを自由にする』という精神を礎に頑張っていきたいと思います。

(たちばな・しほ 別府大学附属図書館)